

セルダの「黄金の四角形」とバルセロナ・モデル

志賀 咲穂
環境人間学部 社会環境部門

“El Quadrat d’Or” by Cerdà and Barcelona Model

Sakuho SHIGA
School of Human Science and Environment

Abstract: Barcelona, the second mighty city in Spain is evaluated as one of the creative cities. The technique of the urban renewal from the 1980's is called "Barcelona model". The urban development expansion plan of Barcelona that was planned by Ildefonso Cerdà in the latter half of the 19th century is composed of a square block. However, this quadrangle in Cerdà plan is seen non-humanly, and is homogeneous, because has not the conception of the zoning like the modern city planning. In addition, the Cerdà plan was received the citizens' strong repulsions at the decision, and had changed in quality by the compromise and the plan modification against the idea. I want to clarify the reason why the urban foundation in the Cerdà plan is profitable for the "Barcelona model".

Keywords: Urban Expansion planning, Idelfonso Cerdà, Ensanchar, Modelnisme, Urban foundation

1. はじめに

バルセロナはスペイン第2の大都市である。また、ガウディ建築のある観光都市としてもよく知られる。しかし、単なる観光都市ではない。古代ローマ以来の歴史あるEUの諸都市にあって、1992年オリンピック、文化フォーラム2004などを契機として都市再生を続けるバルセロナは、2009年欧州都市ランキングEMCの総合評価でロンドン、パリ、フランクフルトに次ぐ4位に挙げられ、勤労者の生活環境としては1998年から12年首位を維持し¹、創造都市²の一つと評価されている。また、1980年代からのその都市再生の手法は、他都市の手本として「バルセロナ・モデル」と呼ばれている。

バルセロナを訪れていつも感じるのは、旧市街の中世的な面白さと、新市街の明るく洗練された快適さである。ことに新市街の大きさや整然とした街路に驚く。そして航空写真で見ると、その街区パターンに地上で見る以上に驚かされる(図1)。密集した旧市街の外に「板チョコ」³と揶揄される幾何学的なパターンを

並べ広がるのが、新市街エンサンチェ(アシャンプラとも呼ぶ)である。この極端なまでに正方形の街区は、19世紀後半に都市計画家イルデフォンソ・セルダが立案したバルセロナの都市整備拡張計画(セルダ・プランと呼ばれる)によるものである。その内の最も華やかな地区は「黄金の四角形(El Quadrat d’Or)」⁴という名でも呼ばれる。

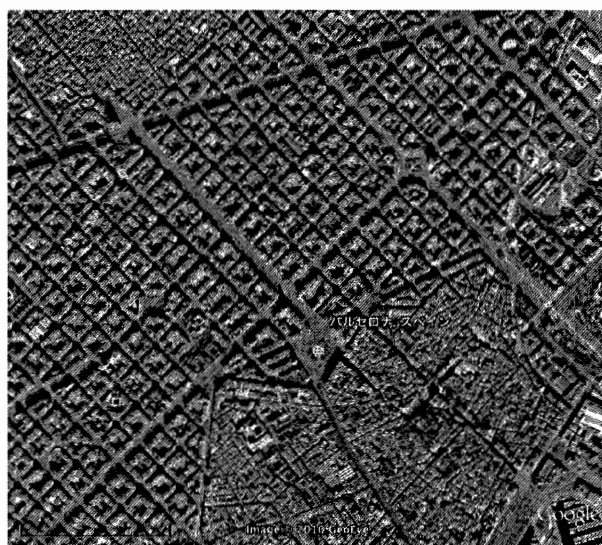


図1 バルセロナ市街の航空写真
(Google Earth より)

¹ 岡部：文献(6) p.224による。

² 芸術文化の持つ「創造性」を、新産業や雇用の創出に役立て、ホームレスや環境問題などの解決に活かし、都市を多面的に再生させる都市モデル。(佐々木：文献(8) p.4による)

³ 美術評論家ロバート・ヒューズの言葉(岡部：(6))

⁴ GARCIAESPUCHE：文献(2)の表題

しかし、この黄金の四角形は非人間的にも見える。また、後述するように、セルダ・プランには近代都市計画のようなゾーニングの発想はなく、どこまでも均質である。さらに、セルダ・プランは策定当時から市民の強い反発を受け、妥協や計画改変によってその理念とはおよそ違った姿に変質しているのである。

現代バルセロナにおける都市再生については、岡部や阿部らの多くの著作・論文⁵⁾によって分析され、明らかにされている。しかし、快適で活力溢れ、高い評価を受けている都市バルセロナで、都市基盤に少なからず影響を与えているセルダ・プランが、上述のように、非人間的、前近代的であり理念の実現が成されていないと評価されている点に筆者は興味を持った。また、近年セルダの理論の再評価が進み、形態規制等の見直し、街区の再編が進められていると聞く。1世紀近く評価されなかった⁶⁾にもかかわらず、セルダの都市計画理論の何が今日のバルセロナの都市再生においてなぜ有益なのか、を明らかにしたい。

2. 都市計画家セルダとバルセロナ都市整備拡張計画

2-1 セルダと時代背景

イルデフォンソ・セルダ (Ildefonso Cerdá) は 1815 年にカタルーニャ山岳地帯にあるビック近郊のセンテリャス村で、裕福な地主の三男として生まれた。ビックの神学校で哲学を学んだが聖職者にはならず、家族の反対を押し切って中退してバルセロナの実業学校に転校し、建築、数学、海洋学、図学などを学んでいる。さらに 18 歳でマドリードの土木技術学校に移籍して、卒業後 26 歳で土木技師の称号を取得し、スペイン政府の勸業省に採用されて、8 年間主として道路、水道、電信敷設の技師として勤務した。しかし、父と二人の兄の死によって家督を継ぐことになり、1849 年にバルセロナに戻ったのを機に「都市計画」の研究に専念するようになった。そもそも都市計画 (ウルバニスム) という用語は彼の考案とされている。

マドリードで自由主義運動に触れた彼は、1851 年バルセロナの選挙区から国会議員に当選するが、ユートピア社会主義者カペの思想に触れて次第に急進的な考え方を持つようになり、議員一期の後は市議会の住民代表として、また民兵工兵隊の隊長として、バルセロナの都市暴動やゼネストの渦中に身を置いた。1955 年のゼネスト中、市中心部に集結した労働者を鎮圧する命を受けて出動した際、労働者の要求に共感したセルダの行動は後に弾劾を受け逮捕されたが、釈放の後パリに逃れた一時期、まさに始まったばかりの

オスマンのパリ大改造を目にする好機を得た。⁷⁾

当時バルセロナは、新大陸貿易で得た富をもとにした繊維工業で急成長していた。イギリスの産業革命になぞらえ「カタルーニャのマンチェスター」とも呼ばれた。しかし、政治的にはスペイン中央政府の強い監視下に置かれていたため、市街を取り囲む市壁の外側 1200m 内の建設が厳しく制限されていた。ガウディのパトロンであったグエル家の工場が西のサンツ村 (現在はサンツ駅があり鉄道の玄関口となっている) にあったのも、そうした理由からだった。その結果、3 平方キロに 15 万人以上が住む超過密な旧市街と、無秩序な近郊開発を生むことになっていた。こうして旧市街の拡張が不可欠となったバルセロナでは、ついに市壁の撤去を決定し、撤去後の都市拡張計画の立案をすることになった。

2-2 バルセロナ都市整備拡張計画

セルダは、県知事から都市整備拡張計画の基礎調査用として地勢図作成を委託され、1855 年には完成させていた。また、鉄道技師時代の労働者層との交渉経験から独自に資料データを収集し、労働者層の劣悪な都市環境を報告書『バルセロナ労働者階層についての統計的研究』にまとめ上げた。その後、1859 年には「エンサンチェ・プロジェクト並びにバルセロナ開発」計画案を提案した。

一方、地域主導を求めるバルセロナ市当局は、1858 年都市整備拡張計画のコンペを行って、地元建築家のアントニ・ロヴィラ・イ・トリアス (1816-89) の案を選んだ。ロヴィラ・イ・トリアス案は、旧市街を中心に放射状の軸線で郊外の集落と関係づけながら、細部に広場やブルーパルを配するバロック的な計画案 (図 2) で、市街の拡大を待ち望んでいたブルジョワ層を大いに喜ばせた。⁸⁾

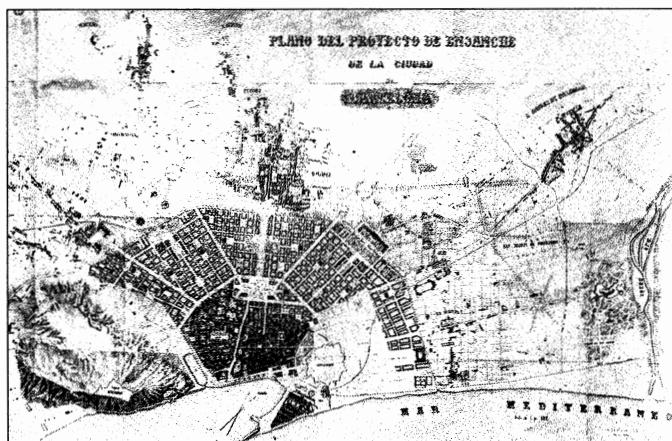


図2 ロヴィラ・イ・トリアスのコンペ当選案 [文献(1)]

⁵⁾ 岡部：文献 (6)、福川・矢作・岡部：文献 (9)、阿部：文献 (4) (5) など

⁶⁾ 1959 年バルセロナ拡張計画百周年を記念して銅像が建立された。山道・八嶋・鳥居・木下：文献 (10) pp.62-66

⁷⁾ 山道・八嶋・鳥居・木下：文献 (11) pp.29-36 より

⁸⁾ 岡部：文献 (6) p.40

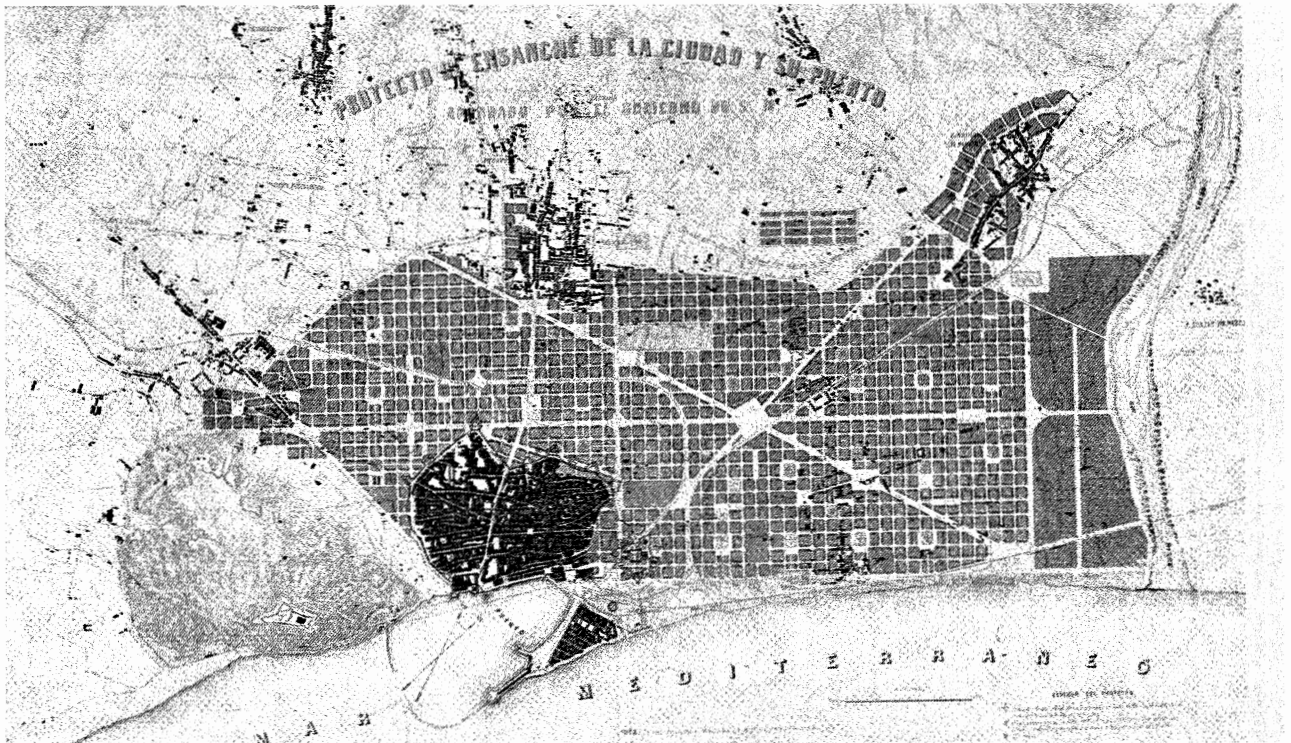


図3 イルデフォンソ・セルダのバルセロナ都市拡張計画案(1859年)【文献(1)】

しかし、計画の決定権限を持つ中央政府は最終的にセルダの計画案に従って整備拡張を行うとの決定を下し、1860年に認可の国王勅令が下った。セルダの拡張計画案は後年「板チョコ」と評されたような無機質な幾何学模様であり(図3)、中央政府から押しつけられたこともあって多くのバルセロナ市民を失望させた。

セルダ自身による用地買収の試みと計画を担保する法律制定は土地所有者らの強い抵抗にあい、計画は実現の過程で変質を余儀なくされた。市壁撤去の跡地は競売にかけられて多くの地主を発生させ土地取得が難航、1863年には改良修正案を作成したが、最終的にセルダの計画は、バルセロナの新市街の街路形態にその痕跡をとどめただけとなってしまった。その要因について阿部は、「ある意味で旧市街を蔑ろにしたセルダ案に対しては、当初から強い反発があった。市の意向は、拡張計画に際してロビラ案を選出したことから分かるように、拡張市街地に関してはモニュメンタルな都市空間の付与、旧市街地に関しては都市形態の保全であった。(略)両者のプランの相違は、イデオロギーの相違に他ならなかった。」⁹と述べている。

3. セルダ・プラン

それでは、セルダの計画とは如何なるものだったか。また、そのイデオロギーについて触れてみたい。

19世紀後半、ヨーロッパでは各地に都市改造の嵐が吹き荒れた。三大都市改造として知られるのが、パ

リ、ウィーンとバルセロナである。パリの都市改造は言うまでもなくオスマンによるものであり、現在のパリの風景を決定した大改造である。エトワール凱旋門を中心とした12本の放射状のブールバールを造り、交通網の整備を図ると共に、道路幅員に応じて沿道の建物高さを定め、軒高を揃えるなど、都市の美観形成に努めた。ウィーンの大改造は、市壁を撤去してリンクと呼ばれる環状道路を敷設するものであった。リンクの沿道には国立オペラ座などが建設された。両都市とも時代の美的感覚を反映した華麗で劇的な都市づくりであった。

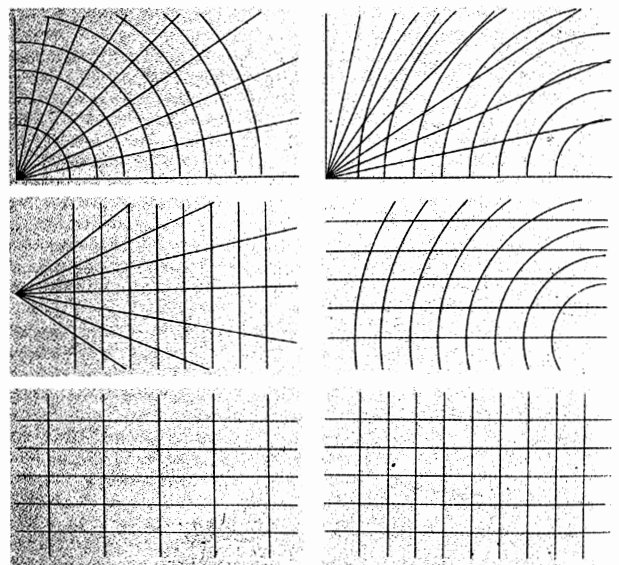


図4 セルダの街路網パターン検討【文献(1)】

⁹ 阿部：文献(5) p.64

一方、セルダ・プランは、一辺 113.3m の正方形街区を基本に均質なグリッドプランである。先述のようにセルダはパリの改造計画を偶然にも視察して熟知おり、また著作中には他の諸都市の拡張計画についても示して研究している。さらに、四角形パターンに至るスタディとして様々な街路網パターンの絵を残している (図4) ¹⁰。

セルダは中央政府の公共事業セクションで、鉄道や道路の施設計画に携わった土木技術者であった。パリやウィーンの都市改造に見るように、当時の都市デザインの課題は急増する都市人口と交通網の逼迫であったが、依然として大街路とその沿道建物による美観形成が重要視され、建築家の仕事と捉えられていたから、土木技術者セルダの登用は先進的であったといえよう。セルダは、工場労働者で溢れるバルセロナの都市改造には、建築家の手法ではなく、科学的な計画手法が必要と考えていた。また、セルダは労働者の生活環境の実態を自ら調査し、その改善の緊急性を訴えた。

セルダ・プランでは、街区の決定過程で次のような検討を示しており、彼の論理を明快に見ることが出来る。(「バルセロナの改善と拡張計画における適用市街地の建設理論」) ¹¹

X : 道路間距離

$2b$: 街路幅員

f : 建築物敷地の奥行き

d : 建築物敷地の間口

v : 建物あたりの住民数

p : 人口当たり個人必要面積 (㎡)

として、次の式を定義している。(図5)

- (1) 隅切り面積は b^2 、街区面積は $X^2 - 4b^2$ 、
- (2) パティオ面積は $(X - 2f)^2$ であるので、
- (3) 建物敷地面積は $4[f(X - f) - b^2]$

$$(4) \text{ 住戸数は } \frac{4[f(X - f) - b^2]}{fd}$$

(5) 街区あたりの人口は (4) に V を掛ける

(6) これに 1 人当たり面積 p を掛けた数が

1 街区の面積 (道路面積も含む) となるから。

$$(X + 2b)^2 = \frac{4pv}{fd} [f(X - f) - b^2]$$

この式を展開すると、街区の 1 辺 X を求めることが出来る。

$$X = \frac{2pv - 2bd}{d} \pm \sqrt{\frac{4pv}{d^2 f} (pvf - 2bdf - b^2 d - df^2)}$$

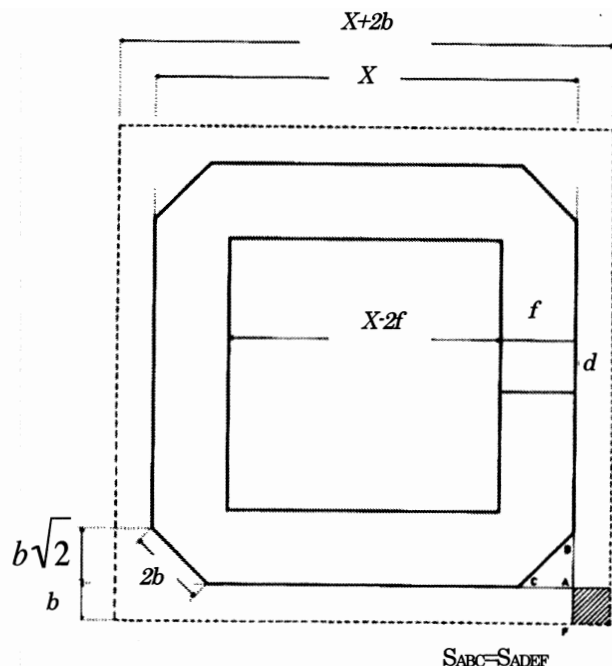


図5 街区算定用の模式図 [文献(1)]

ここでセルダは実数として、街路幅員 $2b=20\text{m}$ 、敷地奥行き $f=20\text{m}$ 、間口 $d=20\text{m}$ 、必要面積 $p=40\text{ m}^2$ (密度 250 人/ha) とし、建物当たりの住民数 v を、4 階建に 71 人、3 階建に 57 人、2 階建に 43 人、1 階建に 29 人の諸条件で試算をしている。

結果的に 3 ブロックで 400m、1 ブロック 133.3m (敷地は 113.3m) としたが、その数理的論理展開は、セルダのイデオロギーを端的に示している。すなわち、この算出式には①街区の位置的な差異は考慮されない。また、②建物当たり住民数にはブルジョア層と労働者層といった階級的格差は考慮されていない。①に関しては、旧市街に近い都市の中心となるべき地区も、遠く離れた地区においても、同じ原理が適用されること。②においては、市民に平等な生活環境の確保をとるという社会主義的な意図がみえる。

イギリスにおいてロバート・オーウェン等が社会改革を主張し、実践したのが 18 世紀末から 19 世紀初頭であり、イギリス同様の紡績業による大きな社会構造の変化を見ていたセルダが、その主張に共感していたことが伺えるが、決してユートピア思想家ではなく、現実を見据えたエンジニアであった¹²。一方、スペイン中央政府の意図が、こうした社会主義的な計画にあったとは思われないが、産業革命による経済的発展を背景に地域の独立を求め、発展を鼓舞するバロック的な都市建設を目指したカタルーニャ及びバルセロナに対して、経済的におくれを取っていたマドリードの中央政府がブレーキを掛ける意味があったことは、充分に考えられる。

¹⁰ SORIAY PUIG: 文献 (1) pp.117-136

¹¹ 同上 pp.262-263

¹² 山道・八嶋・鳥居・木下: 文献 (11) pp.44-45

4. 「黄金の四角形」とモデルニスモ

4-1 「黄金の四角形」の建設

ブルジョワ層を落胆させたセルダ・プランの新市街（エンサンチェ）であったが、計画は幾多の変遷を経験しつつも、少なくとも都市基盤の街路建設が進められた。バルセロナの歴史家グラシア・エスプーチェは、そのエンサンチェの歴史的な姿を「黄金の四角形」という写真集にまとめている。¹³ 「黄金の四角形」は、今日バルセロナの都市景観を形成している、ガウディやイ・モンタネール、プーチ等モデルニスモ建築家たちの活躍の場でもあった。

まず、セルダ・プランの街区の姿を見てみたい。先の街区決定の際の模式図ではパテオを中心に周囲に建築敷地が取り巻いているが、セルダが実際に構想した街区は、旧市街に見られた風通しや日照の悪さへの対応として、2面又は2面を開放する形状だった。図6では中庭（白部分）を挟んで並行する2列の建築（グレー部分）で構成しているが、他にL型配置、コの字型配置も用意していた。また、街区を半分に割ってパサージュ（通路）を通し、2階建ての低層連続住宅も建設している。パサージュのある集合住宅は、高級住宅地として今も僅かに残っている（図7・8）。

グラシア・エスプーチェによれば、計画決定直後の1860年から10年間に5棟以上建設が行われた街区は、旧市街の北部、グラシア通りとサン・ジョアン通りの間の地区を中心に16街区見られた。掲載されている建物の写真を見ると、いずれも3階建てであり、セルダが考えた4層16m以下の高さに収まっている。また、その一つ、グラシア通りに建ったエヴァリス

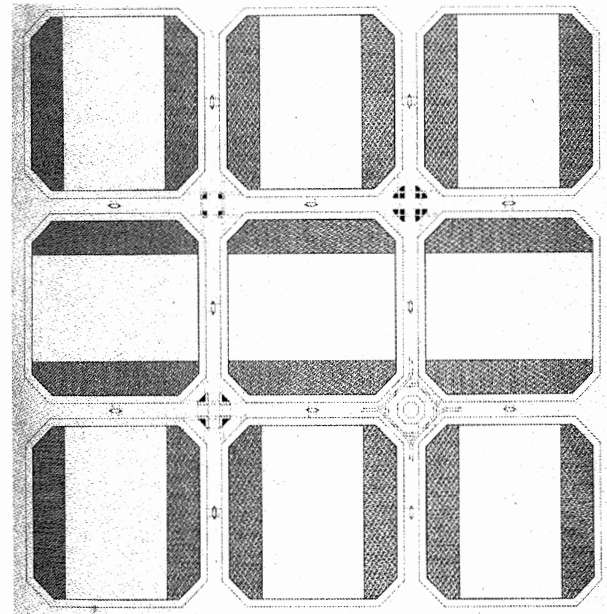
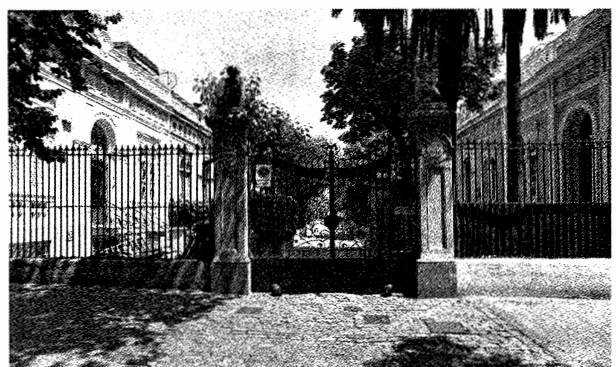
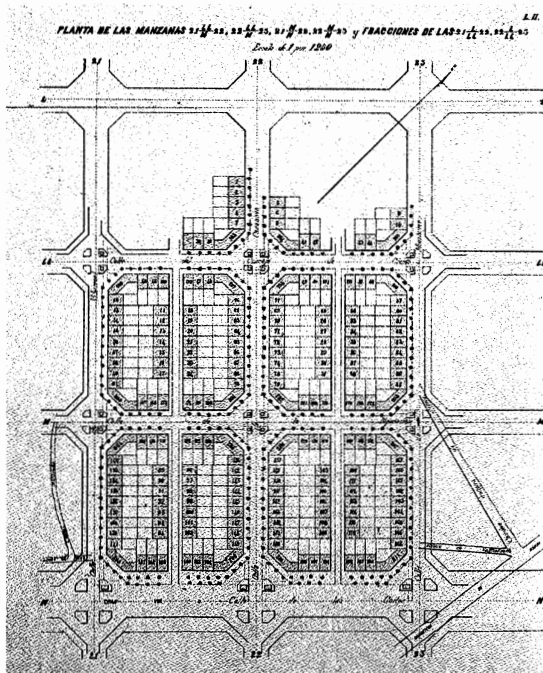


図6 セルダの街区構成図 [文献(1)]

ト・アルヌス邸の写真は、セルダの街区構成図に近い隅切のある一文字の建物と見ることが出来る（図9）。1854年から96年の間のバルセロナにおける住宅建設には二つの山があった。第一の山は先述のセルダ・プラン建設初期であり、1863年にピークに達したが、1866年に鉄道株の暴落から金融危機が引き起こされ、経済の収縮と共に67～8年には終息した。第二の山は1870年代に入って、キューバの第1次独立戦争（1868-78）や第3次カルリスタ戦争（1872-76）が勃発し、戦禍を逃れて流入した富裕層が、新興の住宅地に家を求めたためである。「黄金熱（Fervor d'Or）」と呼ばれる経済の過熱期は1880～82年であった。しかし、この山は1887年頃には終わった。¹⁴



左 図7 街区を2等分してパサージュを入れる計画
上 図8 現在も僅かに残るパサージュのある街区
[いずれも文献(1)より]

¹³ GRACIA ESPUCHE: 文献(2)

¹⁴ 山道・八嶋・鳥居・木下: 文献(10) pp.87-89

当初セルダ・プランでは、建築敷地面積 28%、道路面積 30%、庭園面積 42%であった。しかし、実際に事業が開始するときには、セルダ自らが起草した条例案で建ぺい率の上限を 50%まで引き上げなければならなかった。それでも条例は制定されず議論が長引いた結果、1891 年の条例制定で、セルダの建築規制構想は崩れ去り、建ぺい率上限 73.6%、建物高さ上限 22m、階数制限は 6 層+中 2 階、中庭にも高さ 4.4 m以下の建物や換気口を可能とすることになった。さらに 1923~72 年の間に規制緩和が繰り返され、建物高さの上限は 24.4mになりペントハウス 2 階分が追加された。風通しの良い、日光と緑の溢れるはずの都市は、日の当たらない、名ばかりの中庭を持つ閉鎖的空間になってしまった。セルダ・プランの最大の批判者であった建築家プーチ・イ・カダファルクでさえ、「バルセロナの都市計画の欠点は、全てがセルダのせいなのではない」と述べている¹⁵。

グラシア・エスプーチェの写真集によると、中心街のグラシア通りでも 1873 年には 4 層止まりであるが(図 10、写真に工事中の鉄軌道が写る)、85 年頃には既に階数が 6 層の建物が多数見受けられる。条例成立を待たずに、セルダの考えた規制案は黄金熱と共

になし崩し的に霧消していたことが分かる(図 11)。



図9 グラシア通りのエヴァリスト・アルヌス邸
1868-70 年頃 [文献(2)]

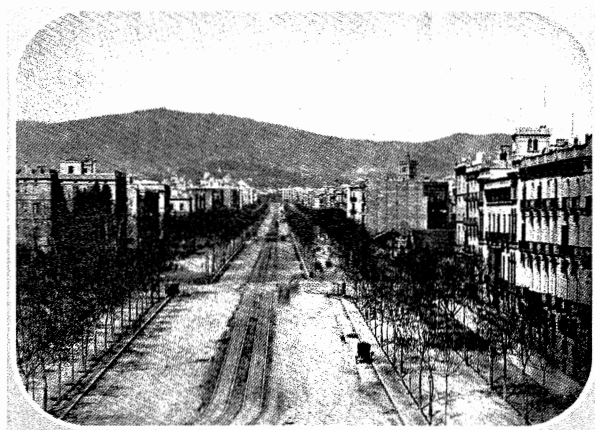


図 10 1873 年のグラシア通り [文献(2)]



図 11 1885 年頃のパルメス通り [文献(2)]

表 建築規制の変遷(文献 10 より編集)

	建ぺい率	内側の空間	建物高さ(階数)
1859 年当初のセルダ・プラン	40%	原則 2 面開放	16m
1860 セルダ起草条例案	50%	凸凹なし	16m (PB+3 階)
1860 年知事回状		建物は禁止	同上
1876 年条例案	50%	凸凹なし	20m (PB+4 階)
1878 年条例案	70%	凸凹を容認	20m (PB (+M) + 4 階)
1891 年建築条例	73.6%	高さ 4.4m を上限とする建物、換気口など許可	20m (PB (+M) + 5 階)
1932 年建築条例	73.6% +2m までのバルコニー許可	高さ 5.5m を上限とする建物、換気口など許可	23m+P (PB+M+5 階+PH)
1942~72 年諸条例	同上	地下 2m も可	24.4m+PH×2 (PB+M+5 階+PH×2)
1976 以降	70%	建物は禁止	PB+5 階+PH

階数の PB は地上階、M は中 2 階、PH は屋上階を示す

¹⁵ 山道・八嶋・鳥居・木下：文献 (10) pp.57-59

4-2 モデルニスモ建築

こうした狂乱の建築熱は、今日バルセロナの都市景観を彩るモダニズム建築を生んだ。有名なアントニ・ガウディ（1852-1926）の建築では、カサ・バトリョ（1904-6）カサ・ミラ（1906-10）、カサ・カルヴェット（1898-9）、サグダラ・ファミリア贖罪聖堂（1883-）などである。また、ガウディのライバルであったドメニク・イ・モンタネール（1850-1923）の自邸（1896）、トマス邸（1895-8）、モンタネール・イ・シモン出版社（1881-6）、レオ・モレラ邸（1905）、そしてサグダラ・ファミリアから北に約600mの所に9街区を1敷地として建設された初めての公立病院サン・パウ病院（1902-26）も彼の設計になる。ユネスコは、1997年旧市街のカタルーニャ音楽堂とサン・パウ病院を世界遺産に指定した。現在は、病院の一部を除き未公開であるが、独立した8棟の病棟と中央の手術棟を地下廊下で結ぶ壮大な病院建築である。

ガウディのカサ・バトリョと、イ・モンタネールのレオ・モレラ邸に挟まれて建つアマトリエ邸（1898-1900）は、もう一人の大建築家ジョセ・プーチ・イ・カダファルク（1867-1956）の作品である。三人の作品が建ち並ぶこの街区は、「不和のリング」と呼ばれている。¹⁶ プーチの作品は他にも、カサ・セラ

（1903）、バリ・デ・クアドラス邸（1904）、カサ・テラデス（1905）等が建っている。

2005年に発行の「バルセロナ・モデルニスモの道」には、主要な115件のモデルニスモ建築が掲載されている。その内の約半数の58件がエンサンチェに立地している。図12はそれらのモデルニスモ建築の見られる街区をプロットした地図である。このように、20世紀初頭にブルジョア層によるモデルニスモ建築のラッシュがあったのは、新市街でも旧市街の北の限られた地区であった。

セルダによる「黄金の四角形」の可能性は、さらに東に向かって拡張されていたが、度重なる規制緩和によって旧市街に近いエリアが華麗な建築で埋め尽くされる一方、労働者層の生活環境は改善されないまま、20世紀後半を迎えたのである。

5. バルセロナ・モデルと22@bcnの都市再生 5-1 バルセロナ・モデル

セルダの考えに反した規制の度重なる緩和のもと、新市街の過密化が進行したが、特にスペイン内戦後のフランコ政権下（1939-75年）、戦禍のなかったバルセロナでは人口の急増と共に乱開発が繰り返され、セルダ・プランで囲壁都市の5倍の1000haに拡大して

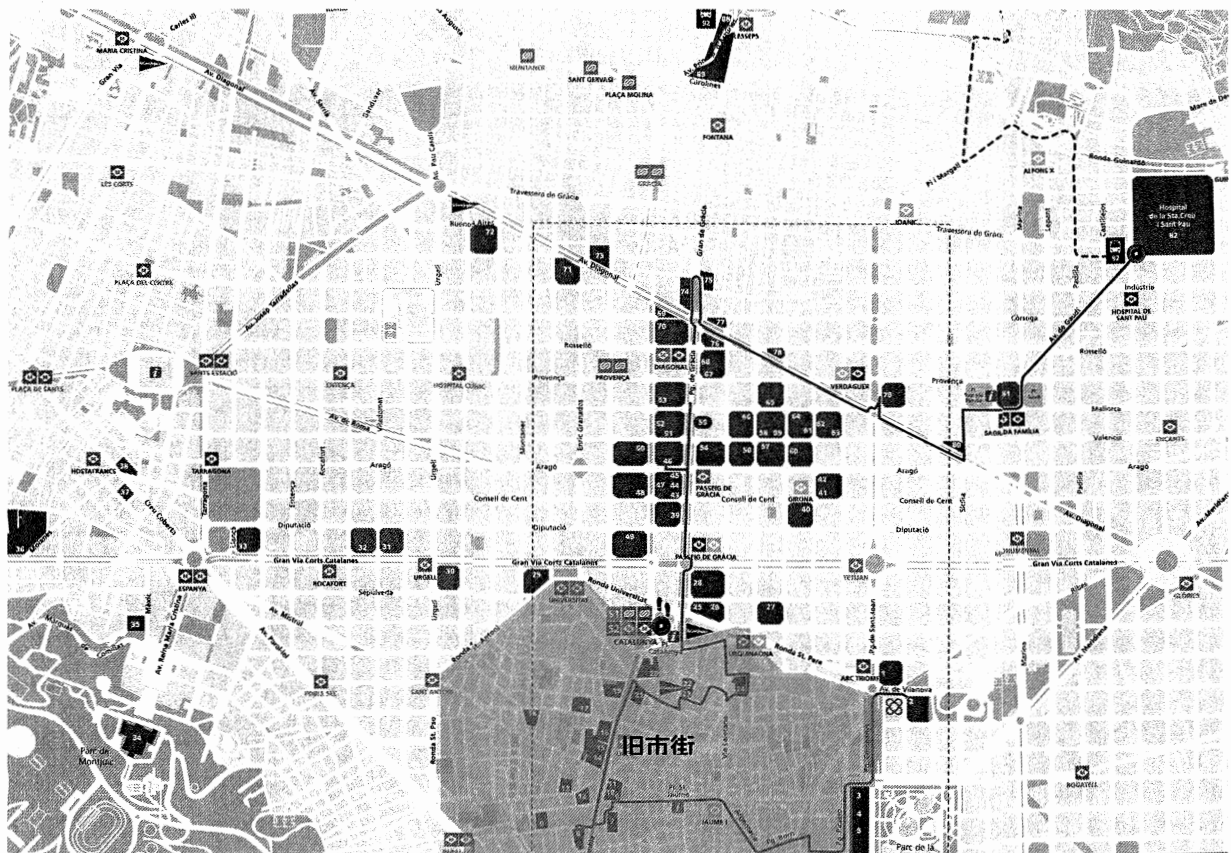


図12 バルセロナのモデルニスモ建築マップ [文献(12)の図を編集]

¹⁶ 岡部：文献(4) p.62

いたバルセロナの市街地は、2500ha までふくれあがり、バラックなど劣悪な居住地区や、周縁部の大型住宅団地が出現した。¹⁷ ようやく規制が強化されるのは1976年のことである(前出表参照)。

乱開発からの都市再生は、1980年代から始まった。その手法は先述の通り、「バルセロナ・モデル」と呼ばれている。具体的には、①旧市街、特にラバル地区の再生から始まり、②1992年開催のバルセロナ・オリンピックを契機とするオリンピック村、③ディアゴナル・マル地区再開発と、近年の④22@bcnへと続いている。バルセロナ・モデルについては、近年様々なレポートや文献が著されているので、簡単に紹介してみたい。

旧市街の都市再生については、阿部の研究に詳しい。ラバル地区は旧市街を東西に分けるランブラス通りの西側で、日当たりの悪い過密地区は不衛生のみならず、犯罪の危険も多かった。バルセロナ市は、1980年から修道院施設が集中する境界の再開発の検討を始め、地元建築家等によって歴史的建造物の再生と共に、現代美術館などの新たな公共スペースを整備する提案がされた。1985年に市街地改善特別プランが策定され、住宅の建て替えと修復の促進、街区の多孔質化による公共空間の創出、既存公共建築物の再生と新たな施設の設置、アクセスビリティの改善、経済活動の推進と境界の多様性の保護が戦略的に実施された。その結果、現代美術館(MACBA:1995、リチャード・マイヤー設計)とアンジェルス広場に代表されるような、洗練されたデザインの街に再生されてきた。¹⁸

オリンピック村は海岸沿いの工場跡地である。1992年夏、バルセロナ・オリンピックが開催され、市民戦争とフランコ圧政から立ち直った姿を全世界に印象づけた。1986年に誘致に成功したバルセロナ市は、通常だと25年にかかる都市事業を5年足らずで成し遂げたといわれる。過半を港湾が占め残りは工場が建ち並んでいた10kmの海岸線を、市民の憩いの場に取り戻し、地中海に顔を向けた都市として再生した。オリンピック関連投資の内、モンジュイックのメイン会場整備には12%しか当てず、オリンピック選手村の整備に25%を当てた。このオリンピック村により旧沿岸工場地区が海辺の市街地に転換し、セルダの描いた基盤の目を150年越しに完成させた。¹⁹

オリンピック後に残された課題は、旧市街に連なる北東沿岸部の500haの衰退した工場地区だった。オリンピック村開発では、計画至上主義的な都市開発のあり方や、住宅整備に偏ってオフィスやホテルなどの都市ストック整備軽視が問題視されたため、バルセロナ市とサン・アドリア・デ・ベソス市にまたがる、

120haのディアゴナル・マル地区の再開発が民間市場に委ねて行われた。新進気鋭だったE.ミラーリエス設計の公園および文化フォーラム2004メイン会場(ヘルツォーク&ムーロン設計)のあるディアゴナル・マル地区と対端のグロリアス広場(ジャン・ヌーベル設計のAGBARタワー、2004が建つ)、およびその間のディアゴナル通りは、質の高い建築群で求心力のある文化中心を形成してきた。²⁰

岡部はこうした一連の都市再生「バルセロナ・モデル」成功の鍵として、「①部分から全体へ、②質から量へ、③難しいところから始める、の逆転の発想」を挙げている。²¹

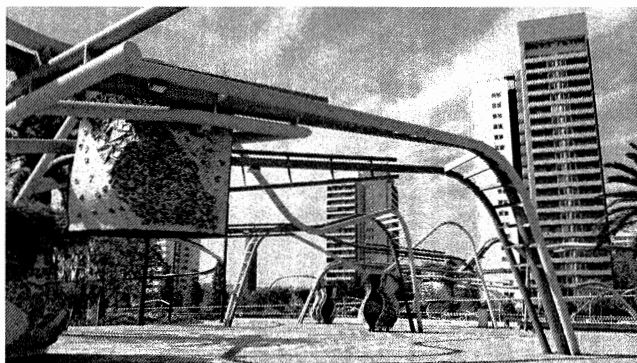


図13 ディアゴナル・マル公園(写真筆者)

5-2 22@bcnの都市再生

22aは工業専用地域を示すゾーニングのコードである。セルダ・プランの四角形が広がる北東部地区は、繊維産業で繁栄したシンボルとして煙突の林立する工業地帯だった。しかし、都市経済の転換と共に工場は打ち棄てられ、劣悪な都市環境に低所得者層が取り残された地域になった。40年にわたるポブレノウ地区再生の最終仕上げとして、コードが22@に読み替えられ整備が進められている。

この都市再生の特徴は、①脱クリアランス型であり、市民活動や経済活動を中断させることなく長期間かけて再生すること、②都市全体の戦略性(ITや文化関連産業優先)に応じた容積率緩和、③市当局が6地区において具体的なパイロット計画を提示し、それを再開発条件とする、の3点である。雑然とした職住混在の街の素地をセールスポイントに、サービス産業にシフトし、職住近接の生活スタイルを競争力としている²²。セルダの基盤目がそれぞれに違った計画で埋め尽くされた全体計画図(図14)は、パッチワークを見ようで見ようで楽しくなる。

¹⁷ 岡部:文献(6) pp.146-147

¹⁸ 阿部:文献(5) pp.103-139

¹⁹ 岡部:文献(6) pp.195-204

²⁰ 福川・矢作・岡部:文献(9)、pp.145-151

²¹ 同上 pp.123-124

²² 同上 pp.151-156



図 14 22@bcn地区全体計画図（文献(3)より）

6. まとめ

1世紀半前に当初から幾多の批判を受け改変を余儀なくされたセルダ・プランが、バルセロナ・モデルとして評価される今日のバルセロナの都市再生に対し、どんな役割を果たしたか、まとめてみたい。

(1) 1辺 113.3m の街区と幅員 20m の格子状道路網によるエンサンチェは、規制緩和圧力による内部の過密化はあったものの、都市基盤（インフラストラクチャ）整備として着実に実行された。特に、旧市街に近い中心地のみならず、東部臨海地区にまで実行されたことは、近年の22@地区プロジェクトにも大きな効果をもたらしている。岡部の指摘した「部分から全体へ」の逆転の発想も、実はこの都市基盤があったからこそ可能だったのではないかと例えるならば、ハードとソフトの関係で、適切なソフトを得て元からあった強力なハードが活用されるようになった、と言える。

(2) 幅員 20m の道路構造規格は、クルマ社会の到来にも耐えることが出来た。さらに、20m の大きな隅切りを入れたことが、市街の見通しの良さを確保してきた。

(3) セルダは、南欧で都市計画をさす用語「ウルバニスモ」とその概念を初めて世に問うた「都市化の一般理論」の表紙に、「都市を田舎に、田舎を都市

に：…地を満たせ」²³と記している。これは英国エベネザー・ハワードの「明日の田園都市」より約 30 年早く環境共生の考えを示したものである。20 世紀後半になってようやくセルダ・プランに盛り込まれようとした環境共生のまちづくりが行われている。

(4) セルダは、囲壁都市の 5 倍の新市街を用意しようとした。しかし、それは旧市街を核とした同心円型プランではなく、同規模の違う街を 5 つ造るものであった。もし、ロヴィラの計画が実行されていたら、今日の拡張性は得られていなかっただろう。ある意味で、コンパクトシティとも通じるものがあつた。

(5) セルダは、蒸気機関による公共交通の導入を想定していた。バルセロナ市は、近年トラムによる公共交通網の整備に取りかかっている。脱クルマ社会を予見するようなセルダの構想は、1世紀半の後に開花したといえる。

2010 年春、バルセロナを訪問した同時期に、伊東豊雄設計のトーレス・ポルタ・フィラの竣工の記事と共に、バルセロナの都市的魅力の源泉を分析した論文が、日経アーキテクチュアに掲載された。²⁴ 祝祭的

²³ “Rurizad lo urbano; urubanzad lo rural: ...Replete terram” (SORIAY PUIG: 文献 (1) p.27)

²⁴ 小針、福田：文献 (7)

な都市イベントに合わせて行われてきた都市開発と、成長を促す迅速な都市機能の配置転換や、サステイナブルな都市としての環境の再整備が、バルセロナの都市の価値を競争力あるものにしてきたことが、具体的な建築例を伴って述べられている。

何度か訪問するたびに、その都市的魅力と活気に惹かれてきた筆者が今回知り得たのは、19世紀半ばにセルダが構想し、形態は留めたものの都市開発の経済的圧力などで変貌してきた新市街を、セルダの都市計画の理念に立ち戻りながら、将来に向けて活かそうとする都市施策の存在だった。

情報化、国際化など、ダイナミックに変貌を遂げる現代都市において、1世紀半も昔の都市基盤整備が有効に機能することは、やはりセルダの都市計画理論の普遍性、先見性を裏付けるものだろう。特に都市部の人口急増現象を脱し、再び人間の住む場所としての都市、サステイナブルな環境の再整備が急がれる今日、セルダの都市計画理論の再評価は一層進むと考えられる。

謝辞

この論文を書くきっかけは2010年4月のバルセロナ訪問であった。その際に、多忙の中現地を案内いただくと共に、多くの貴重なご示唆や資料を賜った Gaspar Garcia i Buyreu 氏、また FIRA Barcelona やサン・アントニの図書館を案内いただき、貴重なご示唆を賜った小針修一氏（伊東豊雄建築設計事務所スペイン事務所）、さらに通訳役に当たってくれた Ollara Cegarra さんと拙娘有希子に心より感謝の意を表します。

参考文献

- (1) SORIA Y PUIG, Arturo (Compilación): *Cerdá – Las cinco bases de la teoría general de la urbanización*, Electa, 1999
- (2) GARCIA ESPUCHE, Arbert: *El Quadrat d'Or – Centro de la Barcelona modernista*, Ajuntament de barcelona, LUNWERG, 2002
- (3) Ajuntament de Barcelona, Urban Planning Department: *Modification of the PGM (General Municipal Plan) for the Renovation of the Industrial Areas of poblenou*, Ajuntament de barcelona, 2000
- (4) 阿部大輔：『スペインの歴史的市街地における保全再生戦略に関する研究—バルセロナ旧市街における再開発過程の分析を中心に』、東京大学大学院博士論文
- (5) 阿部大輔：『バルセロナ—旧市街の再生戦略』、学芸出版社、2009
- (6) 岡部明子：『バルセロナ—地中海都市の歴史と文化』、中公新書、中央公論新社、2010
- (7) 小針修一、福田誠：『バルセロナの建築動向—既存建築の魅力を増す“都市的視点”の現代建築』、日経アーキテクチュア 2010 年 4 月 12 日号、日経 BP 社、2010
- (8) 佐々木雅幸：『創造都市と文化政策の課題』、アカデミア平成 22 年冬号、市町村アカデミー、2010
- (9) 福川雄一、矢作弘、岡部明子：『持続可能な都市—欧米の試みから何を学ぶか—』、岩波書店、2005
- (10) 山道佳子、八嶋由香利、鳥居徳敏、木下亮：『近代都市バルセロナの形成—都市空間・芸術家・パトロン』、慶應義塾大学出版会、2009
- (11) Ajuntament de Barcelona: *Ruta Del Modernisme (Modernisme Route Barcelona)*, Institute Municipal del Paisatge Urbà i la Qualitat de Vida (IMPUIQV), Ajuntament de Barcelona, 2005

(平成 22 年 9 月 24 日受付)